



東日本大震災の経験を生かして

安否確認・避難誘導はコミュニティ活動で

3月11日の東日本大震災は、温暖な気候で災害のないまちという日立市のこれまでの評価を一変させました。地震発生と同時に、学区（地区）コミュニティでは、自主防災組織を活用して、避難所の運営、ひと

り暮らし高齢者や障害を持った人などの災害時要援護者の安否確認と避難誘導などの活動を行いました。日頃のコミュニティ活動の成果を検証し、災害時のコミュニティの役割の重要性を再認識する機会になりました。

津波による浸水や液状化による被害、屋根や塀の崩落、家具等の転倒など被害状況は地域によって様々でしたが、地震発生と同時に交流センターや小・中学校体育館などが避難所となり、避難所の運営が始まりました。コミュニティ主体の運営や行政が中心になった避難所もありましたが、災害時要援護者の安否確認と避難誘導は、地域の事を知り尽くしている学区（地区）コミュニティ活動が有効であったと言えます。

これまで市はコミュニティへ2回のアンケート調査を行い、7月6日と8月11日の2回にわたって意見交換会を実施しました。

調査では初動体制、避難所、要援護者、支援物資、情報、行政の対応などに関する課題や反省点が明らか

になり、これらの課題に対する解決策も検討されました。

また、災害時のコミュニティの役割と行政の役割、災害時の行政への要望等がまとめられました。これらの事は市の防災マニュアル作成や防災対策に活かされる予定です。

調査結果（主なもの）



避難所の運営

■課題：初動体制で避難指示や避難所設置の情報不足、コミュニティ、

における危機管理は、行政とコミュニティとの協働が不可欠であることが立証されました。この東日本大震災の検証・分析を行い、「行政とコミュニティ活動のあり方検討委員会報告書」に盛り込むことになりました。

7月28日、震災後の第1回目の会議では、1年前のチリ地震に伴う津波警報に係る対応検証、東日本大震災の日立市の被害状況、コミュニティ単会の災害支援活動状況などが報告され、災害時における行政とコミュニティの役割等について意見交換を行いました。

9月末日までには「あり方検討委員会」の報告書をまとめる予定です。

民生委員、婦人会等と連絡できずに連携が不可能。避難所では防災無線や発電機がない。トイレの水の確保が困難。水や毛布等の備蓄。避難所となる学校体育館の鍵の所管。災害時要援護の登録者や登録者以外の安否確認の方法。支援物資では給水情報の混乱。避難所や車両等の燃料不足。

■コミュニティの役割：住民の避難誘導と災害時要援護者支援（民生委員や地域福祉推進員等と連携強化）。ひとり暮らし高齢者「ふれあいチーム」づくり。避難所開設、運営や支援（物資配給や炊き出し等）。住民へ情報提供（被災状況、給水、湧水場所等）。情報収集と市へ要望の集約。市対策本部とのパイプ役。防災訓練の充実（初動体制など）。住民の自助努力の啓発。学区内の幼・小・中学校の子ども安全確保。学区内の老人介護施設の避難支援。医療機関、公的機関、企業等との連携強化。

行政とコミュニティ活動のあり方 震災時の協働を盛り込む

平成21年12月に発足した「行



会議が再開

政とコミュニティ活動のあり方検討委員会」は、十数回の会議を重ねて3月末日には市長へ答申を予定していましたが、3月11日の東日本大震災の発生によって、震災時の地域

待ちに待った利用が再開 久慈交流センター

東日本大震災の津波の被害によって使用できなくなっていた久慈交流センターの一般利用が、8月22日から再開します。

この間、南部支所の一部を間借りしてコミュニティ運営をしていましたが、ようやく元のみなと町の久慈交流センターで活動が開始されます。※エレベーター、空調設備については復旧作業中です。

「なかまるしえ」気軽にご利用を！ 便利な場所で無料

「なかまるしえ」は日立駅前地区のにぎわいづくりと、日立地区中心市街地の活性化を目的に、今年2月にイトーヨーカ堂日立店ピ・タッチ館1階にオープンして半年が過ぎました。6月までの利用状況では1万人を超える市民の皆さんが利用しています。さらに多くの人に利用され、広く市民の交流の場となるよう、日立市コミュニティ推進協議会でも支援をしています。

この場所は日立駅に近いという利便性と、利用しやすいという環境にあり、無料で使える「なかまるしえ」を、グループや自己PRの場として大いに活用してください。

□利用法の概要を紹介

1. ステージコーナー

音楽、ダンス、マジック、お芝居など、ステージをあなたのパフォー

マンス発表の場に使ってください。

2. 展示コーナー

幼稚園や小・中学校で制作した作品、絵画や写真、趣味のグループの作品などが展示されており、鑑賞できます。

7月には23のコミュニティ組織の事業概要や東日本大震災時の避難



場所の様子などがパネル展示されました。会報も常時展示されています。

3. 親子交流コーナー

市民の皆さまからいただいた約

400冊の絵本があります。読みながら遊びながら親子の会話が楽しめます。

4. 交流コーナー

だれでも自由に立ち寄って沢山の人の交流ができます。

また、運営委員会が企画する様々なイベントにも参加できます。

ミニ体験コーナーでは、折り紙、編み物、ビーズ、スイーツデコ、トールペイント、スクラップブックなど沢山の企画を考えています。

忘れずに受診を！ 特定健診受診率アップに取り組む

市の健康づくり推進課では、国民健康保険に加入している40歳以上74歳以下の方の、特定健康診査の受診率アップに取り組んでいます。

日立市は23年度の受診率目標値を55%としており、今年度から集団健診と医療機関健診のどちらかの受けやすい方法を選んで受診することができます。

市とコミュニティでは様々な方法で、市民が自らの健康に関心を持つ機会づくりに努めています。集団健診会場になっている交流センターなどでは、女性限定日や無料託児コーナーを設け、食生活改善推進員による減塩みそ汁の試食も行っています。

特定健診の受診率アップのため、各学区コミュニティ推進会では、「健康に自信のある方も、治療中の方も、忘れずに健診を受けましょう！」とちらし配布や回覧などと併せて受診の呼びかけを行っています。

※特定健康診査とは：これまで40歳以上の方の一般的な健康診査は居住している市町村が住民を対象に実施していましたが、平成20年4月からは、40～74歳の方には、医療保険者が、加入者（被保険者・被扶養者）に行うことになった健康診査です。特にメタボリックシンドローム（内臓脂肪症候群）に着目した健診です。

あなたもコミュニティのメンバー 交流センターは活動の拠点

皆さんがお住まいの学区（地区）コミュニティ組織が交流センターを拠点に、それぞれ特徴ある活動を進めています。きれいなまちづくり、自主防災、青少年育成、地域福祉活動など多彩な活動の場となっています。※詳細は全世帯配布のパンフレットを参照ください。



地区・学区	会長	交流センターTEL
十王	沼田 明博	39-2411
豊浦	山田 孝志	43-5755
日高	志賀 勝弘	42-4050
田尻	鈴木 利治	42-1552
滑川	遠藤 進	22-1654
宮田	田尻 久	27-6835
中里	石川 諒一	70-8005
中町	福地 稔昌	21-5564
中小路	矢部 敏晴	22-6483
助川	永井 久善	23-0955
会瀬	柴田 和彦	25-1577
成沢	黒澤 宣明	35-5587
油縄子	益子 功喜	38-7531
諏訪	澤田 貞英	33-3841
大久保	作山 英一	34-0535
河原子	小又 義康	33-3746
塙山	西村 ミチ江	34-5404
大沼	大江 日出雄	35-8329
金沢	鴨志田 勝雄	36-3985
水木	高橋 幸隆	52-3225
大みか	川村 広	53-5211
久慈	須田 昭	52-0165
坂下	鈴木 正義	52-3155

「生活の足」を確保 小学校と連携でバス乗車体験学習

諏訪地区では山側の高台にある住宅団地や急速に進む少子・高齢社会の問題を抱え、将来も安心して暮らせるための「生活の足」を確保しようと、平成20年度から3年間にわたり、日立市の支援で、行政・バス事業者・地域の三者によるパートナーシップ協定を締結し、国土交通省からの助成事業として公共交通実証運行活動を実施してきました。

この事業も4年目になり国からの助成事業は終了、今年度は地域として重要な時期となりました。地域住民の理解と協力を得ながら「生活の足」を確保するため、この活動は継続していかなければなりません。今年度も三者による諏訪学区公共交通委員会は存続することになり、将来

を展望した活動を模索中です。

この活動の一環として、7月11日に諏訪小学校と地域連携事業で「2学年生活科体験学習」の時間を、日立電鉄交通サービス(株)の協力で、校内でバス乗車体験を実施する



バス乗車体験学習の一コマ

ことができました。児童63名のほか、教職員、保護者、日立電鉄交通サービス、市役所都市政策課、コミュニティ推進会、茨城大学工学部学生

たたない地域では、「祭り」はと躊躇せざるを得ないかもしれません。

とはいえ、大みか学区のように形を変えても実施しようと、計画や立案に前向きな機運も生まれた地域もありました。

また、大震災からの復興と銘打って実施した学区も数多くあり、日高学区でも地域を挙げて、より盛大により華やかに、そして住民全体の祭りを目指した地域もみられます。

夏祭りには地域が結束し、同じ方向に向かう。そして何よりも人の繋がりが強くなること。今年の夏も大震災に負けず地域の特色を生かした祭りが各学区で実施されました。

コミュニティ活動の ハンドブック編集

日立市の市民や市職員等のコミュニティ活動に対する意識の醸成を図るための「コミュニティ活動ハンドブック」作成のための編集委員会が設置されました。9名の委員で6ヶ月かけて、コミュニティリーダー向け、市職員向けのハンドブックを編集します。

等が参加しました。

石川八千代校長は「児童は公共交通であるバスに乗る体験を通し充実した時間を過ごすことができた。停留所も実際に設置してもらい、ハイカードを使用するのバスの乗車ということで愉しんで取り組むことができた。保護者の中には初めてバスに乗車する人もあり、よい経験であった。今後、バス利用に関心を持ってもらえればと思う」と話しました。

初めての学校との連携事業でしたが、児童や保護者からこれからもバスに乗りたいなどの声を聴くことができ目的は達成しました。今後も継続して本事業を展開していきます。

日立市の節電対策 相談会に約900名

東日本大震災の影響による電力不足は、深刻なものとなっています。

日立市役所では、業務に支障のない範囲でできるだけ消灯し、エアコンは外気温が28℃を超えたとき



にぎわう節電相談コーナー

け、設定温度を28℃にして使用するなど、電力使用量を20%削減することを目標に、様々な節電対策に取り組んでいます。6月の電気の使用量は去年よりも20.8%削減することができました。

また、7月9日、10日には「なかまるしえ」を会場に、節電診断やLED電球と白熱電球の比較実験など節電に役立つ情報を紹介する「みんなの節電相談会」を開催、2日間でおおよそ900人の方の来場がありました。

日立市は率先して節電に取り組みます。皆様も引き続き節電へのご協力をお願いします。(環境政策課)

夏祭りのテーマ 東日本大震災の復興

花火大会のポスターが貼出され、学校の夏休みに合わせたかのように、祭りの太鼓が聞こえてきて、祭りの到来が実感できたのが通年のことで



震災復興をテーマに

した。

しかし、今年は東日本大震災の復旧中のこの時期の祭り開催となると、甚大な被害を受けた地区と被害が少なかった地区など、その地域により取り組みにも差異があったようです。

夏祭りには人々の気持ちを鼓舞させるものがあり、地域の絆をより強固にする特別なものがあります。

特に、津波の被害や地震による家屋の損壊のために、復旧の見通しが



単会リレー訪問 特色ある活動紹介（Ⅸ）

日立市には概ね小学校区をエリアに活動している23のコミュニティ単会があります。それぞれの単会では地域福祉、防犯・防災、青少年育成、子育て支援、環境、生涯学習などをテーマに、多くの住民と一緒に地域の特色を活かしたまちづくりを続けています。今回は会瀬学区コミュニティ推進会和成沢学区コミュニティ推進会を紹介します。

あいさつで築く 人の和、地域の和、活動の輪 会瀬学区コミュニティ推進会

地域独自の課題解決を図りながら環境問題や青少年育成、自主防災や交通防犯、地域福祉など、地域全体の生活課題ととらえ、住民とのふれあいを深め、地域に密着したコミュニティ事業を展開しています。



1月15日 浜の焚きあげ祭

交流センターを活動拠点に、地域での健康づくりや人材活用で人の和と活動の輪を大きく広げています。

「健康づくりくらぶ」は、50代～70代が年間36回の活動。「新日立音頭」は準備運動、ステップ台やボール運動の他、ウォーキングや料理教室等多彩な活動を行っています。

地域の子どもは地域で育てるという視点で「会瀬に住んでよかった!」と思う活動をする青少年育成部は、0歳～4歳の親子教室「ひよこちびっこくらぶ」を5回シリーズで開催。また、学校や家庭でできない体験を月1回実施する「おおせ元気っ子クラブ」は平成16年にスタート。クラブ員は会瀬小の3・4年生、OBの5・6年生はサポーター、今年69名の登録がありました。

日立市環境教育支援事業の「あらゆる環境を体験で学ぼう」は、エコキャンドル、マイうちわ作り、緑のカーテン涼しさのひみつなど身近なエコ体験をしています。

夏・冬休みの子どもの居場所づくり「おおせっ子サロン」は、民生児童委員やPTAの協力で開設。子ども会育成会の協力で実施する宿泊体

学区内組織をつなぐ 学生との連携を視野に

成沢学区コミュニティ推進会 黒澤宣明会長のほか2人の役員にお話を伺いました。

成沢学区コミュニティ推進会では、地域の多くの人々が気軽にコミュニティ活動に参加できるようにするために「成沢ふれあい盆踊り」「成沢町民体育祭」「成沢ふれあい文化祭」を、三大大行事として、大切にしているそうです。地域の諸団体と協力し、実行委員会を組織して、にぎやかに実施している伝統事業です。

また、環境美化活動も盛んで、推進会の道路里親活動を始め、団地支部などによる花壇づくり、鮎川をきれいにする会、池の川弁天池を復元する会など、地区内のあちこちで環境を守る活動が実践されています。

さらにそれらの活動を生涯学習や支部活動の活性化に生かしています。福祉活動や防災などの安心安全の活動も含めて、推進会を中心に学区全体が協力し合い、バランスのとれた活動をしています。

東日本大震災時には、想定外の災

験「おおせ元気っ子体験村」も思い出の1ページとなります。

学校の連携で実施する「三世代敬老の集い」は保育園、幼稚園、会瀬小児童全員が学年ごとに発表。恒例の「浜の焚きあげ祭」には児童全員が参加、無病息災を願う集いです。

柴田和彦会長は「未来につなぐ地域づくり・人づくり」と話します。

害に、コミュニティとしての連絡体制の不備を始め多くの課題が見つかりました。しかし、収穫は学区内にある茨城大学の学生の活躍でした。学生が避難所で様々なボランティア活



楽しいスポレク祭

動に取り組みましたが、中でもトイレ掃除当番を昼夜を問わず献身的に行い、避難された方たちから多くの感謝の言葉が寄せられました。成沢学区には茨城大学工学部や日立工業専修学校という、他学区にはない貴重な人的資源があることを実感したそうです。

今後、学生や学校と、どういった連携ができるか検討し、協働を働きかけてコミュニティ活動に新しい風を取り込みたいとのこと。まずは、文化祭での連携から検討しているそうです。